日本ロシア文学会　関西中部支部　会報

発行　日本ロシア文学会関西中部支部事務局
住所　〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1　神戸市外国語大学　藤原潤子研究室
電話　078-794-8237　　Email　junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

研究発表会・総会の報告

2024 年 7 月 14 日（日）に関西中部支部の研究発表会・総会が、神戸市外国語大学近隣の施設 UNITY 及びオンラインで開催されました。

研究発表会

今回は 5 件の研究発表がありました。発表者と題目は以下の通りです。会報の後半に報告要旨を掲載しています。

（1）浅野智夫氏（大阪大学大学院生）
「ソ連／ロシアの戦勝記念日にみる「物語」：
軍事パレード演説テクストの内容分析を中心に」
司会：高橋健一郎氏（大阪大学）

（2）松山勝哉氏（神戸市外国語大学大学院生）
「創作理念としての「生」：
クプリーンとブーニンの創作において」
司会：清水俊行氏（神戸市外国語大学）

（3）発表者：平嶌寛大氏（神戸大学・岡山大学（非））
「Я. П. コゼルスキーの道徳哲学について：
『親がかり』のスタロドゥームの台詞と比較して」
司会：清水俊行氏（神戸市外国語大学）

（4）杉野ゆり氏（京都大学大学院生）
「プーシキン『青銅の騎士』の作者注より：
F．アルガロッティの『ロシア旅行』について」
司会：木寺律子氏（京都産業大学）

（5）発表者：宮風耕治氏
「ロシアのオカルト小説の研究に向けて：
SF 史との関連から
司会：大平陽一氏

支部総会

1）会員の異動

横江智哉氏（京都大学、2023 年 10 月新規入会）
オルガ・クラシナ氏（神戸外大非常勤、2023 年 10 月新規入会）
斎藤慶子氏（早稲田大、2024 年 4 月に関西中部支部から関東東北支部へ異動）
木村崇氏（2024 年 4 月ご逝去）

2）2023〜24 年度決算

2023〜24 年度（2023 年 4 月〜24 年 3 月）の決算報告が承認されました。

収入

費目	予算	決算
繰越金	655,877	655,877
会費	0	0
利子	4	5
その他	0	1010,000
合計	655,881	1665,882

支出

費目	予算	決算
通信費	5,000	1,560
総会運営費	10,000	7,515
理事候補選挙費用	100,000	104,677
文具費	2,000	0
交通費	0	0
その他	1,000	0
次期への繰越金	537,881	1552,130
合計	655,881	1665,882

３）2024〜25 年度予算

2024〜25 年度（2024 年 4 月〜2025 年 3 月）の予算案が承認されました。

収入

費目	予算	備考
繰越金	1552,130	
会費	0	
利子	5	
合計	1552,135	

支出

費目	予算	備考
通信費	5,000	
総会運営費	10,000	
文具費	2,000	
交通費	0	
その他	1,000	
次期への繰越金	1534,135	
合計	1552,135	

４）次期支部長および理事候補オンライン選挙費用の次年度予算事前承認

2025 年 4〜5 月頃に行われる理事候補選挙費用として 110,000 円程度の支出が承認されました。

６）選挙管理委員

次期支部長および理事候補選挙の選挙管理委員として、事務局長藤原潤子に加えて、岡野要氏に依頼することが承認されました。

７）会費、入会費について

支部会費及び入会費を、引き続き当面無料とします。

８）次期当番校

来年度の研究発表会・総会の当番校は名古屋外国語大学に決まりました。

研究発表会報告要旨

ソ連／ロシアの戦勝記念日にみる「物語」: 軍事パレード演説テクストの内容分析を中心に

浅野智夫（大阪大学大学院生）

広く知られているように、ソ連／ロシアにおいて、第二次世界大戦における独ソ戦の記憶に基づく「大祖国戦争」言説は、ナショナル・アイデンティティの形成・強化をはじめとする重要な政治的・社会的役割を果たしている。同言説においては、「平和を愛する我が国を極悪非道な敵が侵略したが、我々は多大な犠牲を払ってこの敵に勝利し、祖国と世界を救った」とする「物語（ナラティヴ）」が展開される。2022 年 2 月に開始されたロシアによる対ウクライナ全面侵攻をめぐっても、プーチン大統領は開戦に際し放送された演説で繰り返し独ソ戦に言及し、ウクライナの「非ナチ化」を戦争目的の一つに掲げた。これほど大きな影響力を有する「大祖国戦争」言説の「物語」について改めて考察することは、独ソ戦をめぐる歴史認識がロシアの政治・社会にどのような影響を及ぼしているのかを理解する一助となるであろう。

発表者は修士論文において、以上のような問題意識に基づき、対独戦勝記念日にモスクワの赤の広場で挙行されてきた軍事パレード（戦勝パレード）の際の政治指導者による演説を主たる対象として、演説テクストの内容分析を行い、それによ

って「大祖国戦争」言説の特徴の一端とその変遷を明らかにしようと試みた。本発表では、その概要を述べる。

分析対象は、1945 年、1965 年、1995 年、2020 年、2022 年に行われた戦勝パレード演説、及び独ソ戦期の 4 つの演説とする。

分析方法としては、フレーム分析と定量分析を採用する。まずフレーム分析として、総計 13 のフレームを設定し（「被害」、「極悪非道な敵」、「平和を愛する我々」、「友邦／友好的国民」、「闘争」、「勝利」、「愛国／聖戦」、「英雄」、「他国民の救済」、「戦時指導者」、「連合国への貢献」、「新たな脅威」、「和解」）、各演説テクストの 1 文ごとにどのフレームが編成されているのかを判断する。このうち、ソ連時代における 4 つのフレーム（「極悪非道な敵」、「平和を愛する我々」、「愛国／聖戦」、「英雄」）については、その内容が「革命的／社会主義的」な価値観に基づくものか、「伝統的／普遍的」な価値観に基づくものかによる分類も 1 文ごとに行う。さらに定量分析として、各演説のテクストごとの総単語数に占める、フレームごとの総単語数の割合を算出し、それぞれのテクストにおけるフレーム間の比較を行うとともに、各テクストを通じた同一フレームの割合の通時的変化を確認する。これにより、それぞれのフレームに付与された重要性の程度とその変遷を明らかにする。

分析の結果から、以下の 2 つの結論が導かれる。第一に、独ソ戦が「愛国主義的」戦争あるいは「聖戦」であったことを強調する「愛国／聖戦」フレームが、比較的大きな割合を安定的に占めていることが明らかになった。このことから、「愛国／聖戦」フレームは戦勝パレード演説にみる「大祖国戦争」言説において、最も中心的な役割を果たしているといえる。言い換えれば、同言説が有する力の最大の源が愛国主義の喚起、あるいは聖戦性の認識にあるということが確認できるのであり、これを以て同言説の基本的な特徴とみなすことができよう。

第二の結論として、「愛国／聖戦」以外の各フレームの占める割合、さらに「愛国／聖戦」も含めた各フレームが拠って立つ価値観は演説ごとに変化しているということも判明した。つまり、同じ「大祖国戦争」言説を提示するものであっても、それぞれの演説テクストに置かれる重点、及び付加される価値観やニュアンスには相違がみられるのだ。その相違は、スターリン崇拝や冷戦、体制転換やウクライナ戦争など、各時期の政治・社会・国際情勢を反映したものである。そして、これら情勢の中には、独ソ戦期における伝統的価値観の復権や、戦後における国民感情への配慮といった、「下からの作用」すなわち総体としての一般国民からの要求に基づく動きも含まれている。戦勝言説が国家権力の意向あるいは強制力のみによってではなく、総体としての一般国民の意向や要求からも影響を受けて構築されてきたということが示されているのである。

創作理念としての「生」：
クプリーンとブーニンの創作において

松山勝哉（神戸市外国語大学大学院）

この発表では、主に 20 世紀前半に活動した作家 A・クプリーン（1870-1938）と I・ブーニン（1870-1953）における「生 жизнь」を創作理念として分析し、その内容を論ずる。

クプリーンは、ロシアにおける彼の名声が最も高かった 1908 年において、「宗教は作り物です、芸術が生なのです」と記している。これは当時の「宗教の衰退」についてのアンケート記事に対するクプリーンの回答文であるが、ここで語られているのは、権力としての「宗教」は衰退してしま

い、我々に残されているのは「自分自身の「我」へと向かう動き」という理念だけであり、それを達成し得るのが「芸術」である、ということである。ここにおける「動き」は「生」と同義であり、「自分自身の「我」へと向かう動き＝生＝芸術」が創作理念としてクプリーンにおいて機能していたのである。

もちろん、クプリーンのテクストにおいて、この理念が必ずしも「生」という語のみにおいて表現されるわけではない。しかし、「自分自身の「我」へと向かう動き＝生＝芸術」という思想は、晩年のクプリーンに至るまで一貫していると言えよう。以下、1924 年にパリで発表された作品『御者ピョートル』からの引用である。「生活は、別の作家たちにとっての侮辱的な言葉「風俗作家」なんてものをつくりだした批評家たちにとって忌まわしいものらしい。だがなぜ、その生活の中に、その変わることのない出来事の繰り返しの中に、毎日の日常生活の中に、言葉、動き、決まり文句、歌、行事の一様な習慣の中に――なぜそれらの中に、全体の生における、とりわけ私の存在を確立させる、私には説明することの出来ない魅力が、常に生きて来て、今も生きているのだろうか？」

クプリーンのテクストにおけるこのような思想に注目し、共感を抱いていたのが、ブーニンなのである。ブーニンはクプリーンを、「ゴーリキイや、アンドレーエフや、シャリャーピン」のような、「自分の名声に絶え間なく酔いしれながら生きていた」人物たちと区別している。そして、「私は自分が好きなんだ」というブーニン自身の発言に共感する人物として、ブーニンは、クプリーンを語っている。もちろん、これはナルシシズムの表明ではなく、両者の思想の根底に「我」が置かれていたことを暗に示す挿話として語られている。

ブーニンは、同時代のありふれた思想の混入や、トルストイやチェーホフなどのいわゆるロシア・リアリズム系の作家からの模倣を、クプリーンの作品に対して指摘している。しかしそれは、そのような思想の混入や作家の模倣から脱したところに現れるクプリーン固有の「本物の妙技」を発見するための指摘であった。ブーニンがクプリーンの作品に見る「本物の妙技」も、原理的には、クプリーンが語っていた「自分自身の「我」へと向かう動き」と同義である。ブーニンによるクプリーン評は、まさに、「自分自身の「我」へと向かう動き＝生＝芸術」という思想を両者が共有していたことを示しているのである。

また、このような分析を可能としている要因として、両者における L・トルストイ（1828-1910）の影響を挙げたい。『トルストイの解脱』（1937）においてブーニンが盛んに論じているのは「生」である。そして、「「我」とは、全てを広く理解し、全てを許し、全てを愛し、全てをありのままに見るものなのです」と言うクプリーンの「動き＝生＝芸術」の理念も、やはり、「全ては神が人の喜びのためにお創りなさったものだ」というトルストイの『コサック』（1863）的な思想を受け継いだものであると言えるだろう。

クプリーンやブーニンは小説家として活動していたのだから、その本質は小説作品の中に見出されるべきである。しかし、彼らの小説創作の前提となる「生」の理念に触れずして、彼らの創作の意義を文学史上に位置づけることは、困難である。

Я. П. コゼルスキーの道徳哲学について：『親がかり』のスタロドゥームの台詞と比較して

平嶌寛大（神戸大学・岡山大学（非））

本発表では、18 世紀ロシアの哲学者、政治家であった Я. П. コゼルスキーの著作『哲学的命題』について取り上げる。ここでは特に、法律の根底にあるとコゼルスキーのが考える道徳哲学に注目する。

コゼルスキーはキエフの神学アカデミーで学んだ後、ペテルブルクへと学びの場を移し、その後プレオブラジェンスキー連隊へ入隊した。彼はそこで士官候補生のために『算術命題』と『物理学命題』を書き残し、その他にも外国の書籍をいくつか翻訳した。

本発表で取り上げる『哲学的命題』（1768）の中でコゼルスキーは道徳哲学を「幸福を探求する科学」と定義づけ、さらに道徳哲学を法理学と政治学に区別する。法理学と政治学が道徳哲学に含まれる理由として、善を追い求め悪を退けるような規範を示す必要があるためだとコゼルスキーは説明する。それに続いて、行動それ自体に善悪があるのではなく、その性質と結果によって善悪が判断されるのであり、その判断を下すのは良心と法律だという説明が続く。この良心と法律による悪の峻拒が、社会にとっては有益なものとなる。

ここで興味深いのは、コゼルスキーによる知性への評価である。コゼルスキーは窃盗、強盗、欺瞞の罪を比較し、「賢いという他人の名声を失わせるもの」であるから欺瞞の罪はより重たいものであると述べる。そして、その当時過度に知性を偏重していた人々に対して、知性は美徳よりも下に置かれるものだと釘を刺し、さらに、賢さの有無によって刑罰の軽重を変えるべきではないと説く。つまり、知と美徳の均衡が崩れている状況に警鐘を鳴らしているのである。

知と美徳の均衡に関しては、Д. И. フォンヴィージンの喜劇『親がかり』（1782）においても言及される。四幕二場においてスタロドゥームは、知性それだけでは役に立たぬものであり、「知性に本当の価値を与えるのは徳」であり、賢いけれども徳のない人間は怪物であると語る。

知と徳の関係性について、コゼルスキーとフォンヴィージンの立場は一致しており、美徳を磨くことこそが社会にとって有益なことであると語られる。コゼルスキーは次のように述べる。「いつの時代の経験からも知られているように、人間の理想において、完璧な美徳ほど社会に有益なものはなく、例えば知、力、美が完璧でも美徳ほど社会に有益とは言えない。そのため、[...] ただ少し知が勝っているというだけで賢い人を徳のある人よりも良く評価し、完全に徳高くあるためには知性が必要であると考えない人は不義を働いている」。

コゼルスキーは道徳が知性の上に立つことを強調し、規範で示される道徳を常に守り続けられるよう規範の重要性を説いた。フォンヴィージンもまた、同様に規範の遵守と道徳心を登場人物の一人スタロドゥームに代弁させていた。コゼルスキーとフォンヴィージンは啓蒙専制君主による統治と堕落した貴族社会の是正が必要であるという認識を共有していたのである。

プーシキン『青銅の騎士』の作者注より：Ｆ．アルガロッティの『ロシア旅行』について

杉野ゆり（京都大学大学院）

プーシキンは、叙事詩的物語詩『青銅の騎士』（1833）のテクストに 5 つの作者注を付けている。第 1 の注釈は、序詩の「ヨーロッパへの窓を開いて/海に面したこの地を支配するのは/自然が我々に定めた運命（Природой здесь нам суждено / В Европу прорубить окно[1], / Ногою твердой стать при море）」の「窓」に付されている。詩人は注釈で次のように書いている。「アルガロッティは、どこかでこう述べている： „Pétersbourg est la fenêtre par laquelle la Russie regarde en Europe“」。後半の仏語の文章は、「ペテルブルクは、ロシアがヨーロッパを見るための窓である」という意味である。「ヨーロッパへの窓」という有名なアフォリズムを生んだこの文は、フランチェスコ・アルガロッティ（1712-1764）がイタリア語で出版した『ロシア旅行』（1764）の仏語訳から取られている。M. ネクリュードヴァと A. オスポヴァトは精緻なテクスト研究で、プーシキンが読んだ可能性のある仏語訳の候補を 2 種類あげている。本発表では、『ロシア旅行』の見聞記から注目すべき箇所、特に当時のペテルブルク創設に関わる記述を紹介しながら、プーシキンが同書を注釈に挙げた理由について考察したい。

アルガロッティは、ヨーロッパの宮廷と文化人に多くの知己を有した博学なコスモポリタンで作家、ヴォルテール、英王室の高官、西欧駐在のロシア大使カンテミールやプロシアのフリードリヒ大王と交流があり、大王からは伯爵の肩書を与えられている。彼は、1739 年英国の第 5 代ボルチモア卿とともに、ロシアのアンナ女帝の姪の結婚式に招かれて、6 月から 7 月にかけてペテルブルクを訪れている。その時の見聞記が『ロシア旅行』に収められている。アルガロッティは多彩な才能を持った文人で、オペラ芸術や英国式庭園の美学についても著述があり、近藤裕子はこの分野から『ロシア旅行』の重要性について考察している。

『青銅の騎士』の注釈でプーシキンが言及しているアルガロッティの「窓」は 2 つの機能を持っている。第 1 にロシアから西欧を見る窓であり、第 2 に西欧からロシアを見る窓である。『ロシア旅行』は知人宛ての書簡体形式で書かれており、その記述からは、北方戦争に勝利した後、西欧から驚きと不安と好奇の視線を向けられていた、ロシアという国家や新首都の様子が著者の筆づかいとともに生き生きと伝わってくる。『ロシア旅行』は、西欧から見た 18 世紀のロシア受容を知るうえで非常に価値のある書物である。プーシキンは『青銅の騎士』の注釈でアルガロッティに言及することで、18 世紀のペテルブルクとロシアに関する参考図書として『ロシア旅行』の存在を読者に示唆している。アルガロッティは『ロシア旅行』でクロンシタットの軍港やペテルブルクの街の様子を描きながら、ピョートル大帝の業績を好意的に評価している。ロシアの政治、農奴制、商業、西欧各国や中国との交易、国民気質や地政学について論評し、船舶や軍隊についても多大な関心を寄せている。ロシアの軍隊について詳しく記述している同書は、諜報の役割も持っていただろう。アルガロッティは、しばしばロシアの国力と将来性を、古代ローマ帝国の制度と比べ、あるいは同時代の西欧諸国の社会状況と比べながら論評している。

さらに、『ロシア旅行』の随所に、『オデッセイア』等西洋古典や、数は少ないが『神曲』からの引用や想起があり、アルガロッティの豊かな教養を思わせる。例を挙げると、『ロシア旅行』では、建設されたばかりのペテルブルクを囲んでいた森の描写が、『神曲』地獄篇の序歌でダンテが迷う「暗い森」と連想で結びつけられている。『青銅の騎士』は『神曲』の世界を内在化しており、叙事詩の冒頭に描かれた「森」も『神曲』の森を示唆している。しかし、『青銅の騎士』の冒頭の「森」は、ざわめく木々の音で風の存在を感じさせる。これは『神曲』でダンテが迷った「暗い森」とも、アル

ガロッティが『ロシア旅行』に描いた否定的な森の様相とも異なる特徴である。風の気配は、プーシキンが、『詩人』や『エゼールスキー』で詩人の形象を風と結びつけていることと関係性がある。『詩人』で霊感に満ちた詩人は柏の森へと「峻厳に」（ダンテにも使われている修飾句）駆ける。プーシキンは『青銅の騎士』の「森」に風を吹かせて生命の息吹を与え、「かの人（он）」が語り始める新しい物語の気配を感じさせて、独自の神話的時空間を創造している。

ロシアのオカルト小説の研究に向けて：SF 史との関連から

宮風耕治

ペレストロイカ末期からソ連崩壊後の 1990 年代初頭にかけて、ソ連時代には出版の機会が得られなかった帝政期のオカルト的要素を含む小説が復刊されたが、書籍が洪水のように刊行されたため、十分に注目を集めたとは言い難かった。しかし、2010 年代以降に、少部数ながら再び、復刊の動きが進んでいる。

近代科学技術の発展は人間の時空間の認識の変革を促し、それを背景に 19 世紀以降、SF 小説が次第に確立してきた。一方で、科学が明らかにしえない周辺領域では疑似科学的な解釈が盛んに行われてきた。（超）古代史、超能力、心霊現象、UFO、未確認生物などの題材を取り入れたオカルト小説は、SF と並んで、大衆文学の市場の中で盛んに執筆されていたが、SF とともにリアリズム小説の伝統とは異なる幻想文学の一種と位置付けられ、文学史では十分に言及されない作品が多い。

ロシアでは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、アレクサンドル・アンフィテアトロフやヴェーラ・クルィジャノフスカヤらによるオカルト小説が発表され、象徴主義文学の中でも、オカルト的なテーマは繰り返し取り上げられていた。しかし、ロシア革命後にこれらの作家の多くは亡命を強いられ、1920 代以降はソ連で SF が高揚期を迎えたこともあり、表面的にはロシア文学の中ではオカルト小説は姿を消していった。

欧米の研究では、ローゼンタールが編者となった *The Occult in Russian and Soviet Culture* (1997) と *New Age of Russia. Occult and Esoteric Dimensions* (2013) が包括的にロシア文学におけるオカルト的要素を取り扱っている。その中では、コスミズムをロシアの独創的な思想潮流として理解するのか、「創られた伝統」の典型例とみなすのかという論点も浮かび上がっている。

近年、ツィオルコフスキイの思想はコスミズムとの関連で注目されている。このような理解は、ツィオルコフスキイに私淑していたアレクサンドル・チジェフスキイの主張をコスミズムと関連させることで成立してきた。しかし、太陽活動と地球上の歴史上の大事件や社会変化との影響関係を実証したとするチジェフスキイの疑似科学的主張は、同じくツィオルコフスキイの弟子であり、サイエンスライターとして活躍したヤコフ・ペレリマンやニコライ・ルィニンらの著作とは大きく異なっており、むしろ、レフ・グミリョフのエトノス論と相関している。

SF 史では、遠未来の共産主義的ユートピアを描いた『アンドロメダ星雲』(1957 年) などを執筆し、ソ連 SF の代表的な作家であるイワン・エフレーモフの作品が、コスミズムの潮流の中で受容されるようになってきている。

本報告では、オカルト的小説の系譜やコスミズムの思潮がロシア SF 史にどのように再導入されてきたかという点について、書誌学的な観点も含めて明らかにするとともに、SF 小説とオカルト小説の区別についても考察を深めたい。